

# インタラクションスタイルの文化依存性 Cultural Variation in Interaction Styles

片桐恭弘  
Yasuhiro Katagiri

公立はこだて未来大学  
Future University – Hakodate  
katagiri@fun.ac.jp

## Abstract

an idea of cultural parameters is presented to capture variations in how conversational interactions are organized in different social groups. Manifestation of the parameters are examined in Japanese, English and Arabic task-oriented dialogues.

**Keywords** — Conversation, Culture

## 1. はじめに

人間同士の会話インタラクションには利用される言語の相違だけでなく、会話参加者の帰属する集団の特質を反映した相違が存在する。本発表では、会話インタラクションスタイルを統一的にとらえることを目標として、複数言語の課題遂行対話の分析を通じて、インタラクション行動選択に関する文化パラメータ概念を提案する。

## 2. インタラクションの文化パラメータ

文化は社会集団の構成員によって共有され、維持される集団固有の慣習や行動規範ととらえることができる。人間同士のインタラクションの様態に現れる形式の背後にも社会集団の文化的基盤を想定することが可能であろう。インタラクションと文化との関係については、これまで文化人類学や異文化コミュニケーションの分野において、主に個別具体的な現象の収集・分析という観点から研究が進められてきた[4, 2]。一方、進化生物学の分野では、特に人間において顕著な大規模な利他的行動の基盤として、文化を進化論的に位置づけ、



図 1 課題遂行対話インタラクションの実例

数学的にモデル化する試みも進められている[1]。

人間同士のインタラクションと集団文化とのかかわりをとらえるには、個別集団固有の文化現象記述より抽象度が高く、具体的インタラクション現象の文化依存性の説明に有効であり、同時に文化の進化論的規定と齟齬の無い中間的な文化記述レベルが必要である。そのような中間レベル設定の手がかりとして、同一性、権威依存性、社会的コミットメントの文化パラメータを提案する。

## 3. 課題遂行対話データ

対話行動の異文化・異言語比較を目的に収集されたMr.O コーパスの日本語、英語、アラビア語の課題遂行対話部分を対象にインタラクションスタイルの相違を調べた。15枚のカードを配列して整合的な物語を構築するという物語構築課題を用いている。図1にアラビア語の対話シーンを示す。この課題では、最終的に参加者二名の間で合意が形成されるまでに、物語の断片案の提案、カード配置の提案、それらの評価、質問、批判、賛意表明などが継続的に生起する。日本語、英語、アラビア語のインタラクションには合意形成に至る過程で特徴的な差異が認められる。

## 4. 同一性

集団の構成員の自己には個人としての自己と帰属集団の一員としての自己がある。どちらのレベルでも意思決定を行い、行動を遂行する。集団の意思決定では必ずしも両者が一致するとは限らない。集団ごとに個人としての自己と集団としての

R: これがもう一回、こういってちょっとこれは違  
うのかな  
L: あ  
R: どうなんでしょうね  
L: あ  
R: これまずここで  
L: こう  
R: あって  
L: この二人だけの、まずお話みたいにして  
最後にこの、どっかでグレーを入れて  
R: 次にひとりになってああそうですね  
R: Oh yeah, he climbs to the other side.  
L: Oh, can he do that? maybe...  
R: Yeah, yeah, yeah, he climbs to the other side... And then he... finds out that it's an island. And he cries, cuz now he's stuck in the middle of an island.  
L: Right.

図 2 提案構築対話の日英比較

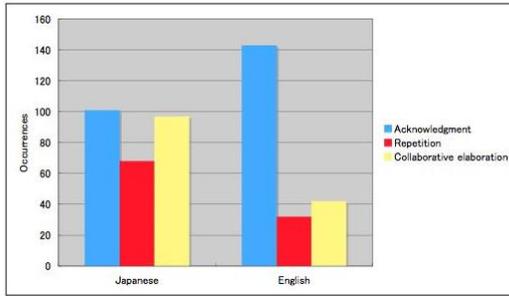


図3 同一性による日英比較

自己のどちらに重点を置くに差異がある。インタラクショナル行動の選択にあたって内容伝達の目的と関係保持の目的のどちらをより重視するかの行動選択傾向の違いと考えることもできる。

Mr.Oコーパス中の日英対話の提案構築例を図2に示す。日本語会話では二人の会話参加者R,Lが対等な立場で提案文自体の共同構築を行っている。英語会話ではRが提案構築を行い、LはRの提案を吟味、批判、受諾するというように明白な役割分担がある。図3には日本語・英語のデータの中の承認、繰り返し、共同構築の生起頻度の分析結果を示す。英語インタラクショナルでは承認が多く、日本語インタラクショナルでは繰り返しおよび共同構築が多いという傾向が見取れる。日本語対話者は集団より、英語対話者は個人よりの同一性を持つととらえることができるだろう。

## 5. 権威依存性

集団の合意形成では合意すべき内容に対する各個人による評価の他に、集団内で力のある構成員の意思が影響する。権威依存性の高い集団では力のある構成員の意思に他の構成員が異論を挟むことが少なく、そのまま集団意思に直結する。権威依存性の低い集団では、構成員が合意に向けた提案内容の評価を交換することを通じて集団意思を決定する。構成員のステータスに依存した行動差は権威依存性が高いほど多くなる。

- 英語話者ではステータス(教員/学生)による行動差は少ない。
- 日本語話者は教員が全体の物語の一貫性に注意を払い学生から提案を促す。学生提案は暫定的性格であり、教員が納得して初めてカード移動を伴う認められた提案となる。
- アラビア語話者は教員が物語構築を主体的に進める。学生は教員から求めのあった場合のみ貢献を行う[3]。

英語対話者に比べて日本語、アラビア語対話者は権威依存性がより高いととらえることができる。

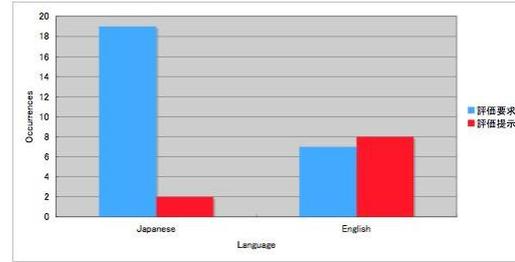


図4 社会的コミットメントによる日英比較

## 6. 社会的コミットメント

個体レベル合理性を越えた集団を利用する行為選択を実現するには、個人の良心のような内的強制装置と、法的罰則・社会的制裁のような外的強制装置が存在する。インタラクショナル行動の選択に当たって内的・外的強制装置のどちらにより強く依存するかを行動選択のパラメータととらえ、社会的コミットメントパラメータと呼ぶ。社会的行為選択において内的・外的強制装置によって集団にとって望ましい選択を実現するためには、集団成員内で行動の良否判断に関する相互理解を確立しておく必要がある。そのために行動の良否判断に関する情報交換がしばしば生起することが予測される。図4に日本語・英語のデータの中の評価提示と評価要求発話の予備的分析結果を示す。英語インタラクショナルでは評価提示の発話が多く、日本語インタラクショナルで評価要求の発話が多いという傾向が見られる。日本語話者は外的コミットメントに、英語話者は内的コミットメントに寄っているととらえることができるだろう。

## 7. おわりに

インタラクショナルスタイルに現れる文化装置を、個人の利益と必ずしも一致しない社会集団意思を機能させるための装置と考えると、文化を進化生物学的な観点から多重進化によって選択された集団・組織の構成メカニズムのひとつとしてとらえることができるだろう。

## 参考文献

- [1] Robert Boyd and Peter J. Richerson. *The Origin and Evolution of Culture*. Oxford University Press, 2005.
- [2] N. J. Enfield and Stephen C. Levinson, editors. *Roots of Human Sociality: Culture, Cognition and Interaction*. Berg Publication, 2006.
- [3] Mayouf Ali Mayouf and Yasuhiro Katagiri. Silence is a sign of agreement: A study of consensus building behaviors in arabic task-oriented dialogues. In *International Pragmatics Conference*, 2009.
- [4] 井出祥子, 平賀正子(編). 異文化とコミュニケーション. ひつじ書房, 2005.